

夕霧の「寝くたれ」の顔

山口 正代

はじめに

『源氏物語』においては、明け方、女のもとから帰ってゆく男の姿を意味する歌語「朝明の姿」が、光源氏（夕顔巻）、夕霧（野分巻）、匂宮（総角巻）の三人に用いられている。すなわち、光源氏、その息子、孫に用いられているのである。そのなかで、夕霧の「朝明の姿」は異色であった。彼の「朝明の姿」を見ているのは光源氏なのである。つまり光源氏と匂宮の「朝明の姿」の場合は、彼らの「朝明の姿」を見送るのが六条御息所、中君であって、「朝明の姿」が本来の用法通り用いられているが、夕霧の「朝明の姿」については通常とは違う用い方をされている。

夕霧の「朝明の姿」については以前論じたことがあり、次のようなことを考えてみた。夕霧の「朝明の姿」は、光源氏の心の奥にある悩み（藤壺との密通、冷泉帝の誕生、夕霧が紫上を垣間見たこと）を暗示するのに効果的に機能しているのではないか¹。

特定の語に着目することで、『源氏物語』の緻密な表現構成をつかむことができるのではないだろうか。「朝明の姿」の用例は物語にも和歌にも少ない。しかし、そうであるにもかかわらず『源氏物語』にはその用例が三例ある。長編の物語にあつて、これを多くと考えるべきか少ないと考えるべきかはわからないが、光源氏、夕霧、匂宮の三人に用いられているということは重視してもよいであろう。

では、光源氏、夕霧、匂宮の三人だけに用いられている表現はほかにはないものかと考えながら読んでいくと、「寝くたれ」がそうであるということに気がつく。「寝くたれ」とは「寝乱れてしどけないさま」（『角川古語大辞典』）を意味する言葉である。これも夕霧（藤裏葉巻）、光源氏（若菜上巻）、匂宮（宿木巻）の三人に用いられている。しかし、ここにおいても、夕霧の「寝くたれ」の顔が光源氏や匂宮のそれとは描かれ方が少し違っている。

本稿では紫式部が「寝くたれ」をどのように用いているか、他の作品とも比較しながら考察していきたいと思う。

一 光源氏の「御寝くたれ」のさまと

匂宮の「寝くたれ」の御容貌^{かたち}

巻の順番で言えば、『藤裏葉巻』における夕霧の「寝くたれ」の顔が描かれている場面が先であるが、最初に光源氏の「寝くたれ」のさまと匂宮の「寝くたれ」の容貌を見ていき、次に、先の二人とは微妙に違う夕霧の「寝くたれ」の顔が描かれている場面を見ていく

ことにしよう。

光源氏の「寝くたれ」のさまは「若菜上巻」中ほどに次のように書かれている。

いみじく忍び入りたまへる御寝くたれのさまを待ちうけて、女君、さばかりならむと心得たまへれど、おほめかしくもてなし
ておはす。なかなかうちふすべなどしたまへらむよりも心苦し
く、などかくしも見放ちたまへらむと思さるれば、ありしより
けに深き契りをのみ、長き世をかけて聞こえたまふ。(④・「若
菜上」八五頁)

光源氏が臘月夜に逢つて、紫上のところに帰つてきた場面である。光源氏の寝乱れた姿を紫上は何も知らないふりをして受け止めるのであるが、そのことが光源氏にとってはかえつてつらいのである。

本文には「御寝くたれのさま」とあるのだが、どのような口語訳がつけられているだろうか。たとえば新日本古典文学大系「源氏物語」三には「寝起きのしどけな³いお姿」、新編日本古典文学全集「源氏物語」④には「御寝乱れ姿」とある。

一方、日本古典文学大系「源氏物語」三には「御寝乱れ髪の御様子」、『源氏物語評釈』第七巻には口語訳は「寝乱れ姿」とあるが、語釈のところでは「寝たため、びんの毛などが乱れた姿」、『源氏物語の鑑賞と基礎知識』No.3「若菜上(前半)」には「寝乱れ髪の様子」とある。つまり、髪の乱れを指している。これはあとで触れるが、歌語「寝くたれ髪」につながる口語訳ではないかと思われる。

次に、匂宮の「寝くたれ」の容貌を見てみよう。「宿木巻」前半部に次のようにある。

寝くたれの御容貌い¹とめでたく見²とこみ³ありて、入りたまへるに、臥したるもうたてあれば、すこし起き上がりておはするに、うち赤みたまへる顔のほひなど、今朝しも常よりことにをかしげさまざりて見えたまふに、あいなく涙くまれて、しばしうちまもりきこえたまふを、恥づかしく思つてうづぶしたまへる、髪のかかり髪さしなど、なほいとありがたげなり。(⑤・「宿木」四〇七頁)

匂宮が六の君に逢つて帰つてきたことを、中君が察知する場面である。しかし、中君は嫉妬とか嫌味とかいつたことを表面には出さないのである。

匂宮の「寝くたれの御容貌」については、『源氏物語評釈』第十巻「寝起きのお姿」、新日本古典文学大系「源氏物語」五「匂宮のしどけな³いお姿」、『新編日本古典文学全集』⑤「寝乱れのお姿」、『源氏物語の鑑賞と基礎知識』No.41「宿木(前半)」では「寝乱れた匂宮のお姿」という口語訳がつけられており、「御容貌」を「姿」と訳しているものがほとんどである。ただし、日本古典文学大系「源氏物語」五のように「匂宮の寝起きの御顔」というような注がついているものもある。

光源氏と匂宮の「寝くたれ」の場面は、男性が女性のもとに他の女のもとから帰つてきて、その女性の冷静さにかえつて心落ち着か

ないということを描いている点ではとてもよく似ている。両者に細部の相違はあるが、「寝くたれ」に着目して考えるならば、その決定的な相違は、光源氏が「御寝くたれのさまを待ちうけて」とだけ書かれているのに対して、匂宮は「寝くたれの御容貌いとめでたく見どころありて」と書かれている点である。つまり、光源氏の「寝くたれ」のさまについては、美しいといったようなことが書かれていないが、匂宮の「寝くたれ」の容貌は美しいのである。

二 夕霧の「寝くたれ」の御朝顔

光源氏と匂宮の「寝くたれ」の場面は内容の上でとてもよく似ていたが、夕霧の「寝くたれ」の顔が描かれている場面はどうであろうか。「藤裏葉巻」の中ほど、夕霧と雲居雁が約七年間の長きに耐えてやっと結ばれる場面で「寝くたれ」は用いられている。夕霧が雲居雁に恨み言を言い、それに反発するかたちで雲居雁が歌を詠むところから見てもみよう。

女いと聞きぐるしと思して、

「あさき名をいひ流しける河口はいかがもらしし関のあらが

き

あさまし」とのたまふさま、いと児めきたり。すこしうち笑ひて、

「もりにけるくきだの関を河口のあさきにのみはおほせざらん

年月の積もりも、いとわりなくて悩ましきに、ものおほえず」と、酔ひにかこちて苦しげにもてなして、明くるも知らず顔なり。人々聞こえわづらふを、大臣、「したり顔なる朝寝かな」と咎めたまふ。されど明かしはてでぞ出でたまふ、ねくたれの御朝顔見るがびありがし。③・藤裏葉 四四一—四四二頁

長年の恨みがたまっていたであろう夕霧は、それを雲居雁に対して言葉にすることで、少し気持ちが楽になっているのかもしれない。光源氏と匂宮の「寝くたれ」は、明け方、彼らが他の女のもとから帰って来て、それぞれの相手の女性に対してその姿を見せるというかたちで用いられていた。夕霧の「寝くたれ」が描かれている場面が、光源氏や匂宮のそれとは明らかに違うのは、結婚の場面で、夕霧はおそらく雲居雁や内大臣、女房たちに寝乱れた姿を見せている点である。

この場面に關して、『源氏物語評釈』第六巻では次のように述べている。

男は「明くるも知らず顔」であり、「人々きこえわづらふ」となる。これが、嫁の家族に対する婿のサーピスでもある。とうとう内大臣が「したり顔なる朝寝かな」と、出てくる。内大臣は婿のサーピスに安心はしたが、娘をとられた気持ちも切実にある。そして、夜が明け離れてから男がわが邸を出るとなると、わが邸の恥じになる。それで「とがめたまふ」。が、夕霧とて心得はある。「されど、明かしはてでぞ出でたまふ」だ。「ねくた

れの御朝顔見るかひありかし。これが、女方の満足なのだ。¹²⁸⁹

また、小町谷照彦氏も「夕霧の「ねくたれの朝顔」は魅力的である。」と述べているように、「寝くたれ」はほめ言葉として用いられている。

このように『源氏物語』の中では、「寝くたれ」は、夕霧、光源氏、匂宮と三人とも男性に用いられている。「寝くたれ」は、光源氏については美しさやその魅力を表すような言葉は用いられていないが、夕霧と匂宮についてはその姿は魅力的なものとして描かれていると言つてよいであろう。

三 『源氏物語』以外の作品の中の「寝くたれ」

「寝くたれ」は「元来、女と共寝したあとの姿の乱れをいう語」である。ゆえに官能的な表現であるこの言葉は、使うことにはやや抵抗があつたのではないかと考えられる。

それでは、『源氏物語』が成立したころの作品にはどのように用いられているのであろうか。それらと『源氏物語』とを比較してみよう。

まず最初に和歌においてはどうかであろうか。和歌では「寝くたれ髪」というように、「髪」の状態をいうことが多い。たとえば、『人麻呂集』には次のようにある。

さるさほのいけに身をなげたるうねべをみてよめる

221 わぎもこがねくたれがみをさるさほの池のたまもとみるぞかな

しき

同歌が『拾遺集』(1289番歌)、『大和物語』(百五十段)に採られている。また、『枕草子』「池は」には人麿の歌や『大和物語』の説話のことを踏まえて次のように書かれている。

猿沢の池は、采女の身投げたるを聞しめして、行幸などありけむこそ、いみじうめでたけれ。「寝くたれ髪を」と、人麻呂がよみけむほどなど思ふに、言ふもおろかなり。¹²⁹⁰

「寝くたれ」は官能性の強い言葉であるが、「寝くたれ髪」という表現は、『大和物語』の説話や『枕草子』によってイメージアップがはかられ、用いることにそれほど抵抗のない言葉に少し変わっていったのかもしれない。

また他には「寝くたれ」と「髪」の組み合わせで次のような歌も見える。

かみ

3169 ねくたれのかみけつるよもあはざればこひしきものをけふはくらしつ(『古今和歌六帖』)

くら人なりし時、衛門の内侍に、くしをかりてかへすとて

69 ねぎごとにかくしかなばねくたれのおどろのかみもなごめて

むかし

かへし

70 ねくとでもよからぬことはきくものかよにうるはしきかみの心

は 『仲文集』

思

37 わすれずもおもほゆるかな朝な朝なしが黒髪くろかみのねくたれのたわ

(『順集』)

『仲文集』の69番歌については男性の髪を詠んだものであるが、一般的にはおそらく女性の美しく長い黒髪が好んで詠まれたのであろう。『源氏物語』より後の成立になるが、大江匡房の『江帥集』には次のような歌も見える。

やなぎ

424 さほひめのねくたれがみをあをやぎのけづりやすらんはるのや

まかせ

春の女神である佐保姫の美しい髪が青柳の糸のイメージで詠まれている。

では、『源氏物語』の中で用いられている「寝くたれの朝顔」(夕霧、藤裏葉巻)もしくは「寝くたれの顔」、「寝くたれのさま」(光源氏、若菜上巻)、「寝くたれの容貌」(匂宮、宿木巻)といったような表現は歌の中に見えるのだろうか。調べてみると、「寝くたれ髪」と「朝顔」の組み合わせの歌は次のようにある。

見し人のなくなりしころ

97 しどけなきねくたれがみを見せじとやはたかくれたるけさの朝

がほ (『小町集』)

この歌の場合にはあさがおの花を擬人化して用いている。

また『源氏物語』成立以後の作品には「寝くたれ髪」と「朝顔」

の組み合わせの歌が次のように見える。

ある女に、たびのあやしきところにておもひがけずあひての
ち、あさがほの花につけて

232 くさまくらねくたれがみをかきわけてそのあさがほのわすら

れぬかな (『江帥集』)

わかき人の、あさがほををりて、御らむせよといひたりしか

ば

468 たとふべきかたこそなれわきもこがねくたれがみのあさがほ

のはな (『江帥集』)

『江帥集』の二首もあさがおの花に朝の顔を掛けて用いている。

ここまで見てきたように、和歌においては「寝くたれ髪」、あるいは「寝くたれ」と「髪」の組み合わせ、「寝くたれ髪」と「朝顔」の組み合わせの歌はいくらかあると云ってよいであろう。しかし「寝くたれ」と「顔」の組み合わせの歌になるとひじょうに少ない。特に「寝くたれの顔」の用例は『千類集』(九九〇年成立)の一例のみである。

こひ十二首

48 あさなけにみしねくたれのかほをこそなにとはなしにこひらる

るはた

小池博明氏も「寝くたれの顔」について、『千類集』48番歌の語釈で次のように指摘している。

「ねくたれ(の)」は、(中略)「髪」の状態をいうのが普通であり、当該歌のように「顔」を形容する例は珍しい。

では、『源氏物語』の古注釈書にはどのようにあるだろうか。『河海抄』巻十二（藤真葉）には次のように記されている。

ねくたれの御あさかほみるかひありかし朝面あさかほ万葉

ねくたれの朝かほの花秋きりにおもかくしつゝみえぬ君哉う六帖
『河海抄』のこの歌は、『續国歌大観』では『古今和歌六帖拾遺』として示されている。

「寝くたれの顔」もしくは「寝くたれの朝顔」の用例は、和歌においては『千類集』、『河海抄』に見られるこの二首のみである。では、この二例の「寝くたれ」は男性、女性どちらに用いられているだろうか。両者とも女性である可能性は高い。ただし、『千類集』の場合、女性の立場に立つて詠んだ歌という考え方もできなくはないので、そうであれば歌中の「ねくたれのかほ」は男性の顔といえるであろう。『河海抄』の場合は、普通は女性が花にたとえられることが多いのでこれもそうとるべきである。しかし、光源氏のように男性が花にたとえられる例もある。たとえば、『若紫巻』では、光源氏の病気が快方に向かい、その席で聖が次のように歌に詠み、光源氏のことをたたえている。

聖、御土器賜りて、

奥山の松のとほそをまれにあけてまだ見ぬ花の顔を見るかな
とうち泣きて見たてまつる。(①・若紫、二二二頁)

そうするとたしかに用例は少ないかもしれないが、『河海抄』の歌の場合、これも男性である可能性は残されているといつてよいであろう。

う。しかし、和歌においてはやはり、「寝くたれ髪」というように、「寝くたれ」が「髪」と結びついて用いられることが多く、その場合は女性の髪の状態を指していることがほとんどである。

それでは散文ではどうであろうか。『枕草子』「関白殿、二月二十一日に、法興院の」には「寝くたれの朝顔」の用例が次のように見える。

殿おはしませば、寝くたれの朝顔も、時ならずや御覽せむと引き入る。

「関白様がおいでになるので、寝乱れた朝のお顔をお見せするのめ時節があわないと御覧になるであろうかと思つて引つ込んでしまふ」という内容である。これも朝の顔にあさがおの花を掛けている。「寝くたれの朝顔」は清少納言をはじめとする女房たちの顔であるので、女性たちの寝乱れた顔である。しかし、ここは有明の別れというような恋の場面ではない。また、寝乱れた顔を見せたくないという内容であるので、美しさを表す表現ではない。

次に、『源氏物語』より成立は後になるが、『浜松中納言物語』の二例「寝くたれの姿」と「寝くたれ髪」を見てみよう。

浅緑なる楳の、何となくけぶりわたりたるほどをながめて、端
近う柱に寄りゐておこなひ給ふに、思ひもかけず、えんなるね
くたれの姿なまめかしくつて、御簾うち上げて、簀子の長押にお
しかりてゐ給ひぬれば、(巻第三)

「これぞ聞ゆる宮の御文よ。かかる御書きさまに、いみじき

言の葉を尽くし給ふは、いかならむ千引の石かなひかさらむ」とて、見せたてまつり給へば、そばみなどもせず、言ひ知らずぶづくしげなる寝くたれ髪、言はむかたなきを、うちかたぶきて、しり目に見おこせ給へり。(巻第四)

ここは恋の場面であり、中納言の「寝くたれの姿」、姫君の「寝くたれ髪」であり、男性、女性の両方に用いられている。『浜松中納言物語』では、「寝くたれの姿」「寝くたれ髪」に波線部「えんなる」「なまめかしうて」「うつくしげなる」「言はむかたなきを」という言葉が添えられているように、「寝くたれ」は優雅で美しいということを表していると言えるであろう。

また、これも『源氏物語』より成立は後になるが、『狭衣物語』に「寝くたれのかたち」が次のように見える。

宿直姿なる童べ若き人々などの出であたる、また寝くたれのかたちども、いづれとなくとりどりにむかひげにて。(巻二)

「寝くたれ」の場面に「をかしげにて」という言葉が用いられている。ここも「寝くたれ」は美しい。

四 夕霧の「寝くたれ」の顔が意味するもの

これまで、『源氏物語』、その他の作品の「寝くたれ」の用例を見てきた。「寝くたれ」は特に和歌では「寝くたれ髪」で用いられることが多く、「寝くたれ」が「顔」を形容する例は『千穎集』にはあるがひじょうに珍しい。しかし、散文では「寝くたれ髪」のほかに「寝

くたれの朝顔」の用例も『枕草子』にはある。そして、『源氏物語』以外の作品では、「寝くたれ」はどちらかというと女性の寝乱れた姿として用いられることが多く、その姿を見られて恥ずかしいという内容のものと美しさをたたえている内容のものがある。ただし、用例は少ないが、「寝くたれ」が男性に用いられていて、その姿が美しいという『浜松中納言物語』のような例は『源氏物語』成立以降である。つまり、これまで「寝くたれ」について見てきたことの上で言えることは、特に夕霧について書かれた「寝くたれの御朝顔見るかひあるかし」という表現は、当時は少し新しい用い方であったのではないかということである。

『源氏物語』においては夕霧、光源氏、匂宮、三人の男性に「寝くたれ」が用いられているが、夕霧と匂宮の「寝くたれ」は魅力的なものとして描かれていた。光源氏の場合は他の二人ほど「寝くたれ」の美しさが強調されていない。またこれまで見てきたように、夕霧の「寝くたれ」の顔は恋の場面で用いられており、光源氏、匂宮のその場面と共通する面はあるものの、彼らとは少し違う書き方がされていた。夕霧の「寝くたれ」の顔が描かれている場面は、他の二人の場合と違って、夕霧の結婚に大きな影響を及ぼす場面で用いられている。雲居雁と結婚するのがむずかかった夕霧にとって、「ねくたれの御朝顔見るかひありかし」は、雲居雁、彼女の父親である内大臣、まわりの女房たちに、夕霧を認めさせるために必要であり、夕霧の結婚を成立させるためには重要な表現だったので

はないかと思われる。

おわりに

『源氏物語』成立以前の作品では特に「寝きたれ髪」という表現が女性に多く用いられていた。「寝きたれ髪」を用いた作品は、優雅な女性だけでなく、美しい男性たちも描いている『源氏物語』にも少しは影響を与えたかもしれない。『源氏物語』においては、「寝きたれ」が夕霧、光源氏、匂宮の三人に用いられているが、夕霧について書かれていた「ねくれたれの御朝顔見るかひありかし」という評言は夕霧という人物造型の一つの方法と考えるとよいであろう。

〔注〕

- (1) 拙稿「夕霧の「朝明の姿」」(『島大国文』第三二号、平成十七年三月)。
- (2) 『源氏物語』の引用は、新編日本古典文学全集『源氏物語』(小学館)により、冊番号・巻・頁数を示した。
- (3) 柳井滋氏他校注、新日本古典文学大系21『源氏物語』三(一九九五年、岩波書店)、二五五頁の脚注。
- (4) 阿部秋生氏他校注・訳、新編日本古典文学全集23『源氏物語』④(一九九六年、小学館)、八五頁。
- (5) 山岸徳平氏校注、日本古典文学大系16『源氏物語』三(昭和三十六年、岩波書店)、二六四頁の頭注。

- (6) 玉上琢彌氏『源氏物語評釈』第七卷(昭和四一年、角川書店)、一四八頁。

- (7) 渋谷栄一氏執筆(鈴木一雄氏監修・中田武司氏編「解釈と鑑賞」別冊『源氏物語の鑑賞と基礎知識』No.3、平成十年十二月)、二〇六頁。

- (8) 玉上琢彌氏『源氏物語評釈』第十一卷(昭和四三年、角川書店)、一四四頁。

- (9) 柳井滋氏他校注、新日本古典文学大系23『源氏物語』五(一九九七年、岩波書店)、五二頁の脚注。

- (10) 阿部秋生氏他校注・訳、新編日本古典文学全集24『源氏物語』⑤(一九九七年、小学館)、四〇六頁。

- (11) 原岡文字子氏執筆(鈴木一雄氏監修・原岡文字子氏編「解釈と鑑賞」別冊『源氏物語の鑑賞と基礎知識』No.41、平成十七年六月)、一二四頁。

- (12) 山岸徳平氏校注、日本古典文学大系18『源氏物語』五(昭和三八年、岩波書店)、五八―五九頁の頭注。

- (13) 玉上琢彌氏『源氏物語評釈』第六卷(昭和四一年、角川書店)、四二四―四二五頁。

- (14) 小町谷照彦氏「方法としての作中歌―夕霧と雲居雁との結婚譚に即して―」(『和歌文学論集』編集委員会編『和歌と物語』、平成五年、風間書房)、五五頁。

- (15) 石田穰二・清水好子氏校注、新潮日本古典集成『源氏物語』七(昭和五八年、新潮社)、一八二頁の頭注。

- (16) 和歌の引用は全て『新編国歌大観』に拠る。

- (17) 松尾聰・永井和子氏校注・訳、新編日本古典文学全集18『枕草子』(一九九七年、小学館)、八九頁。
- (18) 小池博明氏執筆(金子英世氏他、私家集全積叢書19『千穎集全積』、平成九年、風間書房)、四八頁。
- (19) 玉上琢彌氏編、山本利達・石田穰二氏校訂『紫明抄・河海抄』(昭和四三年、角川書店)、四五二頁。
- (20) 松尾聰・永井和子氏校注・訳、新編日本古典文学全集18『枕草子』(一九九七年、小学館)、四〇〇頁。
- (21) 池田利夫氏校注・訳、新編日本古典文学全集27『浜松中納言物語』(二〇〇一年、小学館)、二四三頁。
- (22) 池田利夫氏校注・訳、新編日本古典文学全集27『浜松中納言物語』(二〇〇一年、小学館)、三五七―三五八頁。
- (23) 小町谷照彦・後藤祥子氏校注・訳、新編日本古典文学全集29『狭衣物語』①(一九九九年、小学館)、二三九頁。
- やまぐち・まさよ、広島大学大学院博士課程後期在学——